

2014年7月6日礼拝メッセージ

聖書：第2サムエル記7章1～17節

説教：あなたのための家を作る

1 ダビデ：主の家を作るべきだろうか

イスラエルはたびたびペリシテ人から攻撃を受け、そのことで長い間苦しんできました。ダビデがイスラエルの王となったとき、最初にぶつかったのもやはりこの問題です。ダビデのいのちを狙って、ペリシテ人が攻め込んできました。でもダビデにはまだ十分な力がありません。このままでは負ける可能性がありました。ダビデは主に伺い、奇襲攻撃をかけてなんとか敵を追い散らすことに成功します。

このようにして何度か危機を乗り越えていくうちに、ダビデは少しずつ力を蓄えていきます。いろいろなことを考える余裕が生まれてきます。エルサレムに都を移し、そこえに宮殿を建てました。大きな事故はありましたが、神の箱をエルサレムに移すことにも成功しました。すべてが順調に動き始めます。

でも一つだけ気がかりなことが残っていました。ダビデは杉材で造った宮殿に住んでいるのに、神の箱は天幕の中に置かれたままです。人間が立派な家に住み、神は粗末な家に住む。これでいいのか。不敬の罪で死んだウザのことがずっと心に焼き付いています。もしかして自分も不敬の罪を犯しているのではないか。ならば、神が住まわれる立派な神殿を造るべきではないのか。落ち着かないダビデは、預言者ナタンに相談することになります。

2 主

1) 天幕に住む

これに対し、主はナタンを通して語ります。ひとことでまとめるなら、11節にあることばになるでしょう。「主はあなたのために一つの家を造る。」ダビデは、主のために家を作るつもりだったのに、返ってきたのは、「主があなたのために一つの家を造る」という言葉でした。これでは話が逆さまです。

そもそも、イスラエルがエジプトを脱出した時から今まで、神は天幕の中に住んでいました。天幕とは、文字どおり大がかりなテントのような構造のものです。四十年間荒野を旅した人々と一緒に天幕も移動しました。一つところに留まっている間は天幕が設営され、いざ出発となれば天幕は折りたたまれて、人の肩にかつかれて運ばれました。

それから時代は移り、人々は約束の地カナンに入り、ダビデを王として一つところに住むようになりました。もう天幕は必要ない。むしろきちんとした建物、すなわち神殿を建てるべきではないか。ダビデがそう考えたのは当然なことでした。

でも、考えてみると不思議なことです。神はなぜ天幕の中に住むのでしょうか。神はこの世界を造られた方ですから、天幕など必要がないはずです。そのとおりです。天幕などいらないのです。それなのに、なぜ天幕にこだわるのか。

6節を読みます。「わたしは、エジプトからイスラエル人を導き上った日以来、今日まで、家に住んだことはなく、天幕、すなわち幕屋にいて、歩んできた。」

主はイスラエルとともにおられ、イスラエ

ルを導くために一緒に歩んでくださいました。神の箱は人の肩にかつかれて運ばれなければなりません。それと同じように、神の住まいも人の肩にかつかれ運ばれていきます。神が私たちを導く、ともにおられると言うとき、高い所におられて、口だけ動かしているではありません。神だけが安全なところにおられて、困っている私たちを遠くから眺めているのではありません。この方は、私たちと同じ土の上に立ってくださいます。ともに苦しみを味わいます。そのことを目で見えるように教えるために、天幕をわざわざ造らせます。

2) あなたのために家を造る

その神が、12、13 節でこのように語ります。「あなたの日数が満ち、あなたがあなたの先祖たちとともに眠るとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子を、あなたのあとに起こし、彼の王国を確立させる。彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしはその王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。」

主が建ててくださる家とは、彼の王国、あるいは彼の王座のことのようです。イスラエルの王国がとこしえまで続く、そのように読めます。

実際はどうだったのでしょうか。第一列王記を見ていくと、確かにダビデの死後、彼の子どもであるソロモンが後を継ぎ、神殿を建てていきます。イスラエルの歴史上、もっとも繁栄した時代を迎えていきます。「あなたの身から出る世継ぎ」とは、ソロモンのことであることは確かです。

でも疑問が残ります。ソロモンが死んだあと、イスラエルは二つの国に分裂し、外国か

らの侵略を許し、紀元前 586 年にはエルサレム滅んでしまいます。「とこしえに堅く立てる」と言われたのに、たかだか数百年で終わりです。これはいったいどう考えたらよいのでしょうか。神はうそを言ったのでしょうか。人間が罪を犯したので、その結果、神の計画が途中で挫折してしまったのでしょうか。そんなはずはありません。神が語ったことばは、どんなことがあろうとも変更されることはありません。語られたみことばは必ず成し遂げられます。となると、「彼の王国を確立させる」と言われた「彼」とは、ソロモンでは辻褄が合わなくなります。ソロモンでないなら、誰のことなのか。疑問として残ります。

ついでに言えば、もうひとつ辻褄が合わないことがあります。11 節で「主はあなたのために一つの家を造る」とあるいっぽうで、13 節では「彼はわたしの名のために一つの家を建てる」とあります。いったいどちら建てるのでしょうか。この二つの疑問は、互いに関連があります。「彼」とはいったい誰のことか。次にそのことを考えます。

3 主イエス・キリスト

1) ご自分のからだの神殿

私たちはことばを語るとき、通常一つの意味で語ります。けれども、一つの言葉で同時に二つの意味を語るということも時にはあります。こう言うと何か特殊なことを言っているように聞こえるかもしれませんが、でも、日本に古くから和歌とか短歌という芸術があります。和歌や短歌は、二つの意味を重ねることを楽しむ、そう言ってもいいくらいです。ですから、それほど特殊なことではない。ここもそのような仕掛けになっています。

表向きはソロモンを指しながら、実は別の方を指している。そういう読み方ができます。それは誰か。ここで「彼」と言われている方は、ダビデの子として来られるイエス・キリストを指します。

そのことを前提にしてもう一度13節を読み直しましょう。「キリストが主のために一つの家を建てる」ということになります。でもイエスが人の住む家を建てたというようなことは聖書に出て来ません。これは実際の家ではなさそうです。では何のことか。ヨハネ2章19、20節を読むとわかります。「イエスは彼らに答えて言われた。「この神殿をこわしてみなさい。わたしは三日でそれを建てよう。そこで、ユダヤ人たちは言った。「この神殿は建てるのに四十六年かかりました。あなたはそれを、三日で建てるのですか。しかし、イエスはご自分のからだの神殿のことを言われたのである。」

イエスは、目で見えるような神殿を建てたわけではありません。三日目によみがえられること、それが神殿を建てることであり、ご自分のからだそのものが神殿である、と示してくださいました。

ナタンを通して言われ主のみことば。「彼はわたしの名のために一つの家を建てる。」イエスが来られるおよそ千年も前に、主が死からよみがえられることを神は告げていたことになります。

2) もし彼が罪を犯すときは

主が語ってくださったことは、そればかりではありません。14節。「わたしは彼にとって父となり、彼はわたしにとって子となる。もし彼が罪を犯すときは、わたしは人の杖、人の子のむちを持って彼を懲らしめる。」

ここでも、「彼」というところに主イエス・キリストの名前をあてはめることができます。そうしますと14節の前半は、ヨハネ16章28節で言っていることとぴたりと一致します。「わたしは父から出て、世にきました。もう一度、わたしは世を去って父のみもとに行きます。」

では14節後半の、「もし彼が罪を犯すとき」とはどのようなことか。主イエスは神の子ですから、罪を犯すことはありません。しかし私たちは、この方が私たちの罪を背負われた知っています。父なる神は、ご自分の子が罪を背負われたことを見過ごすことはできません。もしご自分の子でなかったなら、「わたしには関係がない」と言えたのですが、ご自分の子であるという強いつながりがあために、懲らしめなければならないのです。それが十字架でした。主は、人の手で十字架につけられました。人の杖、人の子のむちで懲らしめを受けられました。確かに主がナタンを通して語られたとおりに、父なる神のみもとから来られたひとり子は、人としてさばきをお受けになりました。

ダビデは神のために家を造るべきではないかと考えました。けれども、神はそのようなものは必要がないと言われます。むしろ神のほうが、私たちに対し、永遠に朽ちることのない家を造ると言われます。よみがえられた主イエスが、私たちの住む家となってくださり、私たちを迎えてくださると約束します。主の恵みを覚えたいと思います。